

＝ 鍋の温もり…。 ＝

台風15号、そして広範囲に被害をもたらした台風19号と豪雨。やりきれない思いを抱え黙々と家財の片づけや整理におられる被災地域の皆さん、復旧工事に懸命の対応をされている関係者の皆さんに心からのお見舞いと労いの気持ちを届けたい。そして、多くのボランティアの方々に敬意を表す。

大震災以降、ボランティアへの感謝の気持ちが綴られた記事を見つけた。「みんなの優しさに、心打たれる。彼らは狭い床下にもぐりこんで、重い泥をバケツに何杯もかき出してくれました。誰でも躊躇するような作業を彼らは明るく元気にやってのけてくれたのです。体ひとつで駆け付けてくれたそのボランティア精神は尊く、彼らのひたむきな行動とやさしい温かさによって悲しみと疲れに沈み込んでいた私たちは笑顔を取りもどすことができました」「空洞になってしまった我が家や工場の様子を見るにつけても、何とも言えない悲しさや当たるところのない憤りを感じずにはられません。しかし、黙々と作業して下さる皆様の姿に触れると『このままでは人生は終われない』という気持ちが心の大部分を占めるようになり、弱気である自分が恥ずかしいと思うようになりました。何とか早い時期に仕事出来るように一步一步踏み出すことが、助けて頂いた皆さんに対する答えなのだと思います」。する側もされる側も、それを知る私たちも、心温まる言葉の数々に元気をもらったという人は多い。

今、各被災地には、各地から集まったボランティアの皆さんが住宅の泥のかき出しや家具の運び出し、そして地元の有志らが炊き出しを行い、被災者を少しでも元気づけようと和太鼓の演奏も披露、住民らは笑顔で太鼓の音色を楽しんだとの報道もあった。

思い起こせば、平成7年(1995年)1月17日未明に発生した阪神淡路大震災、記憶に残る最初の大災害であったが、家族や家屋も失い途方に暮れているお年寄りの姿を見て、当時所属していた和太鼓チーム「鐵心太鼓」のメンバーたちと、何かできることはないか、思いを届ける手段はと考えあぐね、出た結論は避難所で暮らすお年寄りの皆さんに和太鼓演奏を披露するというもの。おじいちゃん、おばあちゃんが涙して拍手をくれたと聞き及んだ。時は移れど想いは変わらず…。

「恩送り」という言葉を作家の井上ひさしさんが使われている。恩を受けた人に直接返すのは「恩返し」。「恩送り」は、受けた恩を直接相手に返すのではなく、周りの誰かに送るという意味らしい。送った恩は巡り巡って、恩を受けた人や家族や友人に返ってくる。「恩送り」の巡り合わせが、たくさんの人を幸せにする。あつてほしくない自然災害だが、事あった時に支えるのが人の心の温もりである。

温もりといえば、11月7日は鍋の日。1(い)1(い)7(な)べの語呂合わせ。カニはちょっと高価だが、肉でも魚でも、秋の味覚のかぼちゃ、ごぼう、薩摩芋、里芋、大根、にんじん、白菜、山芋、蓮根(れんこん)等の野菜をたっぷり入れて、そこに柚子(ゆず)胡椒などの薬味(私はカボス)とともに…旨いだろうな～。悲しくつらい話題の多い昨今だが、家族や気心の知れた仲間と箸をつつき合えば冷えた心も体も温まる。

今、基幹労連は、支援カンパとボランティアへの積極的な対応を呼び掛けている。全国の仲間のあたたかい気持ちを行動に移してほしい。

ご安全に

2019年11月1日

日本基幹産業労働組合連合会
中央執行委員長 神田 健一